影のプレーヤー

赤瀬川隼

影のプレーヤー

赤瀬川 隼

文藝春秋

© Shun Akasegawa 1985
Printed in Japan

影のプレーヤー

一九八五年一月三十日第一刷
定価　一〇〇〇円

著者　赤瀬川　隼

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋
〒102東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―二二一一

印刷　凸版印刷
製本　加藤製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします

目次

捕手（キャッチャー）はまだか　5
一九四六年のプレーボール　73
影のプレーヤー　163
あとがき　234

装画　赤瀬川原平

AD　花村　広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

影のプレーヤー

捕手（キャッチャー）はまだか

この小説には、大分中学、臼杵中学、小倉中学など、かつて実在した学校名や、その時代に実際におこなわれた野球の試合のことが出てきます。

しかし、大分中学や臼杵中学にかかわる登場人物と、それぞれの人物の人生経路は、作者のまったくの創作です。たとえば、この小説における大分中学の投手大津留は、当時の実在の投手梅津をいかなる意味においてもモデルにはしておらず、この小説の捕手赤峰は、当時の実在の捕手大塚をいかなる意味においてもモデルにはしていません。他の人物についても同様であることをお断りしておきます。

1

雨脚が速くなり、旅館に急ぐ木谷繁生の靴とズボンの裾が濡れ始めた。左肩にかけた大きな布製のバッグが傘の外に出ている。木谷はそれを、赤ん坊を抱きかかえるように胸の前に廻し、傘

を行手に傾けた。バッグの中には、野球のファーストミット、スパイク、硬球二個、ユニフォーム一式、それに小旅行の身の廻りのものが入っている。

（なんとか今日中にやんでくれよ）と木谷は念じ続ける。（明日、グラウンドは多少ぬかっていてもいい。しかし雨だけはやんでほしい。試合を強行するにしても、頭上から雨が落ちてくるのとこないのとでは、気分がまるで違うんだ。せっかく三十三年ぶりに集まるんだからな）、そういう思いを心の中に秘めておけなくなったように、最後のあたりは「三十三年ぶりなんだからな」と、小さな独り言になっている。

木谷は、別府の流川通りを山の手に向かって歩いている。南北に続く海岸通りを西に折れ、立石山のケーブルカーまで一直線に延びる目抜き通りである。午後の三時に近い。今日は十一月二十四日、月曜日だが、きのうの勤労感謝の日が日曜日に重なったので今日にかけての連休となり、通りは、ホテルや旅館を引き払って、帰りの便までの時間を土産物店でつぶしている観光客でにぎわっている。家族連れ、若い男女、老人会と見える一団、女同士のグループなどが、旅行の終りにさしかかったけだるさと、久しぶりにいい旅をしたとでもいった満足げな面持ちを交錯させながらゆっくりと動いている。五、六人の中年の男たちの一団が木谷とすれ違った。迎え酒を飲んで宿を出、外でまた飲んだのか、顔が一様にまぐろの刺身のように赤黒く、同じ紙袋をさげ、同じように黒っぽいコートを着て、ネクタイを着用に及んでいるところまで同じである。

（どういう人たちだろう。同じ職場か、同窓会か、同業者か、あるいはどこかの議員たちだろうか。いずれにしてもこの上機嫌な顔よ）、と木谷は思う。（そうか。おれも同窓会に集まったのだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った。そして明日はユニフォームを着るのだった)、しかし、ともう一度考える。(きのうから今日の昼にかけては秋晴れだった。彼らは帰り際に雨に降られたのだからまだいい。いっそすがすがしい思いだろう。しかし、おれたちはこれからなんだ。しかも、ただの観光とは違ってこっちは野球……。いや、これは人間の楽しみを差別することになるからやめておくとして、とにかく、おれがこんなにも明日の天気を気にするのは実に久しぶりのことではないか)

さっきまで楚々としておだやかな姿を見せていた鶴見岳は、雨雲に隠れてしまった。やがて木谷は、流川通りを右に折れて細い道に入り、左右の家並みを注意深く眺めて行った。そして一軒の古い旅館の門をくぐった。門にかかる木の看板も古びていて、墨の痕はかろうじて「喜楽荘」と読める。

木谷が喜楽荘の石畳を伝い、玄関に足を踏み入れると、

「おお、キャプテン、待っちょったど」

と太い声がした。

「いやあ、姫野、久しぶりやのう。すまんな、遅くなって」

と木谷は答えた。そして姫野の顔を見ながら、三十年ぶりに会ったのにふさわしいことばを用意しているうちに、姫野のほうが口を開いた。

「キャプテンは、いっこも変わっちょらんのう」

「変わった、変わった。この白髪(しらが)を見てくれや」

木谷は右手で頭髪をかき上げた。すると、生え際に少し白いものが目立った。

「そんなの、変わったうちに入らん。顔つきが変わっちょらんけん。若いのう」
木谷のほうは、姫野の変わりように驚いていた。頭髪は薄くなって、日に焼けたひたいがせり上がり、めがねの奥の瞳は、テレビなどでよく見かける老政治家のそれのように奥まって鈍い光におおわれ、くちびるにたるみが見えた。しかし、かえってそのために、昔からの姫野特有の人なつっこさがさらに加わったようにも、木谷には思えた。(これが三十年間の忠実な反映というものだ)、と木谷は考えながら、その話題で姫野に応酬するのを避けるように言った。
「それはそうと、集まりぐあいは、どげんかね」
木谷のことばは、東京で慣れてしまったことばに、たった今姫野に呼び起こされた大分弁が混ざり始めて、何となく坐りが悪い。
「うん、臼杵のほうはおおかた揃っちょる。こっちはまだ、地元の四人とおまえだけじゃ」
「先生は?」
「先生は少し遅うなる言うちょった」
姫野は、木谷の荷物をさりげなく自分の手に持って歩き出した。
「とにかく、まず、湯につかってこいや」
「うん、一応みんなの顔を見てからな」
「心配なんは、この雨と、キャッチャーがまにあうかどうかじゃ」
二階の廊下を、木谷と姫野が話しながら歩いて行くと、むこうから、長身で精悍(せいかん)な顔つきの浴衣姿の男が近づいてきた。男は木谷を認めると笑顔であいさつした。

「やあ、木谷さん。その節はどうもお世話になりました」
「いや、こちらこそ。遠山さん、とうとう明日になりましたね」
「お手柔らかに」
「それはこっちの台詞ですよ。もう、みなさん集まったんですか」
「ええ。きのう、母校でちょっと肩ならしをしてきました。なにしろ、強敵大中(だいちゅう)とですからね」
「またあ、その手には乗りませんよ。こっちは練習はおろか、まだ九人中五人ですよ。ハンディ大きいなあ」
「とんでもない。うちはおたくに一回しか勝ってないんですよ」
「その一回が決定的だったじゃないですか」
「とにかく木谷さん、先に湯に入ってますから、おいでになりませんか」
「ええ、荷物を置いてすぐ行きます」
遠山肇は臼杵のキャプテンである。そしてかつての主戦投手、一風変わったフォームで横手からくり出す外角低目の速球が、木谷たちを手こずらせた。
いまどき珍しく絨毯(じゅうたん)が敷いてなく、よく拭き込まれて黒光りしている廊下が、歩くにつれてミシミシと音を立てた。木谷は、その廊下の艶と音によって、あのころの生活の色、形、匂いなどを一挙に呼びさまされた気がした。やがて姫野が大きな部屋の障子をあけた。部屋の中の三人の眼が一斉に木谷に向けられた。
「おお、キャプテン、しばらく」

「しばらく」

阿南清志、セカンド、西南銀行大分支店次長。伊東克雄、センター、大分上野丘高校教員。秦剛正、補欠外野手、大分県庁職員。それに、木谷を玄関で迎えた姫野修はサード、今は大分市で運送業を営んでいる。木谷は四人の顔を眺めながら、三十三年前に一気に戻ったような気がした。しかし、その気持がおさまらないうちに、一方では、三十三年前が、今まで思っていたよりも遥か彼方に押しやられてかすんで行くようにも感じられた。この矛盾した二つの感覚にとらわれたまま、木谷はしばらく部屋の入口に立ちすくんでいた。

今度の集まりは、東京に住んでいる木谷が、福岡にいる遠山に出した手紙に端を発している。七月下旬のことだった。

前略　三十三年前、南九州大会決勝戦で、兄の外角低目への絶妙な制球力の前に敗退した、大中の木谷です。兄は、相変わらず眼光炯炯としてご活躍のことと拝察します。

毎年七月も深まると、新聞は高校野球予選の記事でにぎわい、小生、古傷がチクリと痛みます。といっても、もはや淡い快感に近い痛みではありますが。

先日、当時のうちのエース大津留と飲んでいるうちに、小生はなにげなく口走ってしまいました。「あのときの両チームで、できれば同じ別府球場で、もう一度試合をしてみたいな」。大津留はたちまち乗ってきました。「ぜひ実現させましょう。善は急げ。今年中にやりたいですね」

遠山さん、小生と大津留の意気投合を、報復の念に燃える鬼などとは、どうかとらないでください。ただ、私たちの青春の、そのまた真ん中を真っ二つに分けたあの試合を、もう一度無心に再現してみることにより、お互いに四十代後半を通過しつつある私たちの回春とし、時計の針を一度逆転してみたいのです。いや、ちと大げさになりましたが、いかがでしょうか、軽やかな楽しみとして、旧大分中学対臼杵中学で、もう一度お手合せ願えませんか。そしてもう一度、旧制中学の挽歌を奏でようではありませんか。

遠山からはすぐに返事がきた。

前略　貴兄からものの見事に右中間を抜かれた思いです。

私は、博多の街で、当今あまりはやらない紳士服の手作りの仕立てを、少ない常客を相手にやっていますが、最近どういうわけか、スチームアイロンをかけながら、あのころを思い出しておりました。三十年周期とでもいうものがあるのでしょうか。そして、何かしたいと感じながら、それが何であるかに気付かなかったのです。私の心は、目標もなくシャドウ・ピッチングをしていたのですね。そこへ貴兄の手紙が痛烈な打球となって飛んできた、そんなタイミングでした。私の左手のグラブをかすめて右中間を真っ二つ、目が覚めた思いです。文句なくお受けします。

ついては、もし貴兄のご都合がつけば、どこか、東京と福岡のあいだの適当な場所でお会い

して打ち合わせたいですね。貴兄のスケジュールに合わせます。

二人が広島で落ち合ったのは、それから二十日ほど経った八月十五日の夕刻だった。

木谷は、日本ソニックという音響映像機器メーカーの広報室長で、たいてい月に一度は一、二泊の地方出張に出る。八月は運よく西のほうで、岡山と広島になった。遠山に連絡すると、十五日の夕刻には広島に行って一泊できるという。木谷は遠山を広島駅で迎え、その足で薬研堀(やげんぼり)という飲屋街に行き、以前一、二度行ったことのある店に落ち着いた。

「今日は終戦記念日……」

「敗戦から三十五年ですか、早いなあ」

というところから二人の話は始まった。二人が座を占めたのは隅のほうの畳の席で、店の中央は炉端焼風のカウンターになっており、十五、六人の席は満員で、一杯機嫌の声が二人のところまで聞こえてくる。

「まだ八月も中旬ちゅうのに十・五ゲームも開いとったんじゃ、緊張も薄まるのう」

「市民球場は去年より入りが悪いそうじゃ」

「ファンはぜいたくじゃけんねえ」

「おまえも、そのぜいたくな一人のくせ」

木谷と遠山は、そのやりとりを耳にしながら、どちらからともなくにやりとした。

遠山が言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com